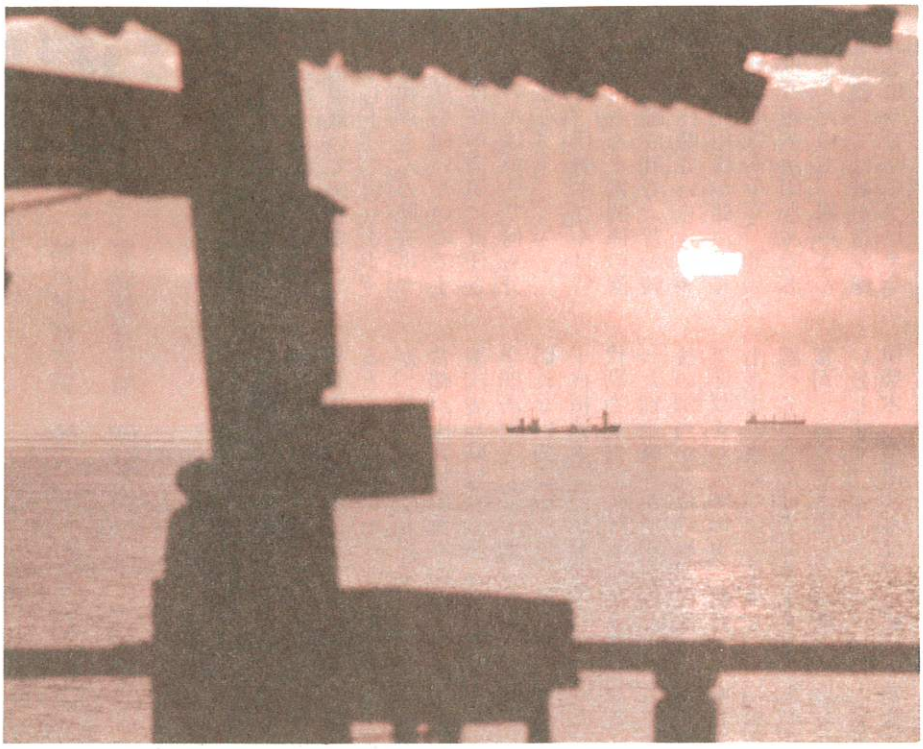


鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

謹賀新年

宮司　佐師朝規

ごあいさつ

明けましてお目出度う御座居ます。

昭和六十年の新しい年を迎え謹みて年頭の御挨拶を申し上げます。

本年は今上陛下御即位六十年の御目出度い御年に当り奉祝の誠を捧げ世界平和と国家の隆昌を始め氏子崇敬者の御繁栄と御多幸を心から御祈り致します。

皆様におかれましても希望に満ちた輝かしい新春を御迎えの事と御慶び申し上げます。

不肖私も皆様方の力強いご支援によりまして昨年八月二十日付を以ちまして宮司を拝命致し神宮に奉仕する者と致しましても神宮の発展と氏子崇敬者の為に全力を尽して参る所存でありますので、皆様方の限りない御協力を重ねてお願い申し上げます。

新春に当り皆様方の御多幸と御健勝を心からお祈り致しまして年頭の御挨拶と致します。

対談

鵜戸神宮宮司　佐師朝規
願成就寺住職　伊勢木俊秀

伊勢木 俊秀氏

宮司　今日はお忙しい中を誠に有難うございます。伊勢木さんには、日頃何かと御指導戴いて居りまして。感謝申し上げて居ります。今日は鵜戸さんの歴史についてお話を伺いたいのですが、私は昨年宮司に就任させて戴いたばかりで何も分かりません。

そこで、伊勢木さんは昔から鵜戸さんと御関係の深い飫肥の願成就寺（昔の談義所）の住職でいらっしゃって、御先祖様が鵜戸さんの最後の別当さんで、第五十九世の観空法印さんであられましたので、鵜戸さんの事に就いては御造詣が深くよく知っていらっしゃるので、鵜戸さんの昔話を少しお聞かせ願えれば幸せであります。

伊勢木　いやよく知っていると云う程ではありませんが、鵜戸さんと私の寺は、昔鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺当時は談義所（寺の学問所）として、切っても切れない関係があり、第五十代桓武天皇の延暦元年初代別当光喜坊快久より始まった別当職の明治維新の最後の別当が先住の観空法印でありました関係上、鵜戸山さまの事については少し調べているだけであります。

宮司　どうぞよろしくお願い致します。

伊勢木　宮司さんは、北郷の潮嶽神社（御祭神は彦火火出見尊のお兄さん火酢芹命）の社家の出身でありますから、鵜戸さんとは御縁が深いのではないでしょうか。

宮司　考えてみますと、私が此処に突然湧いたと思われますが、佐師と神宮とは御縁が深いのですね。と申しますのは、兄も若い時に鵜戸さんに御奉仕して居り、爺も少年時代にお世話になって居り、佐師可一と申して真言宗であったので、此処から京都の智積院に行き、それから高野山に行きまして帰って家の跡を継ぎました。其の又叔父さんがお坊さんでした。又、家内の親父が津田益穂で、此処に永くお世話になって居りました。其の爺が潮と申して此処のお坊さんをして居りました。その前が別当さんで第五十六世の伯仁法印であります。此の様な御縁で私が突然偶然に湧いて来たと申しますよりも御先祖様が「お前鵜戸さんに奉仕せよ」と引張って下さったと感謝いたして居ります。

私は三男坊で、京都の国学院に学び旧官幣大社上賀茂神社をはじめとして、民社の須賀神社に五十年御奉仕して居りました。

ここに尊い立派な鵜戸さんに御奉仕をする以上は、一生懸命頑張って奉仕しなければならないと痛切に考えているところであります。

伊勢木　やっぱり御縁が深かったのですね。

宮司　鵜戸さんの別当時代は、坊さんはどのくらい居ったものでしょう。

伊勢木　鵜戸さんの別当時代は十二の坊があったと云われて居りますから、其の十二の坊に住職が居り、其の下に役僧が何人かずつ居った。此処のお宮さんにもお勤めの別当、坊さんが居ったのですから相当のものだったでしょう。毎朝四時に法螺貝を吹いて起していたと云う事です。

宮司　西の高野山と言われたくらいですから相当の数だったでしょうね。

それから一般神社の境内には私有の土地が無いのに、鵜戸さんはお宮の石段を上ってから私有の土地があるのはおかしいですね。

伊勢木　他のお寺は明治五年ですが、此処のお寺は明治二、三年項寺領五百石から三十石に格下げになっているのです。この時早くも廃佛が出て来ているのです。其の廃佛は間違いであるから早まってはならないと、中央の太政官から廃佛毀釈でなく神佛分離であるから間違いないと様にと布告が出されたが、其の布告が遠隔の地方に届かなかったうちに遠隔の地は廃佛毀釈でやられてしまった。鵜戸さんも談義所もやられてしまった。かくして明治五年に完全に寺が廃されたので、脇坊の十二の坊も廃された。この脇坊に居た住職、住職の居無くなった坊は役僧が還俗して其処に居たので、この人等が土地を払下げて貰った。廃佛になりますと、土地は国のものであったから、国から住んでいた者にくれた様である。そして廃藩置県の時にはっきり登記された様である。

宮司　それで鵜戸さんの石段を上って私有地のある事がわかりました。

それから第一代の別当さんはお坊さんだったのでしょうか、又、第一代の宮司さんはお坊さんだったのでしょうか。

伊勢木　第一代の別当の光喜坊快久法印はお坊さんです。第五十九世まで続き、其の後第一代の宮司新納美庫さんは鹿児島の人でお坊さんではありませんでした。第三代目の宮司高橋宇太郎

さんがお坊さんでした。廃佛の時還俗されて鵜戸神社の神主になられた。明治七年官幣小社に御昇格になって第一代の宮司として新納さんが宮司になられた。

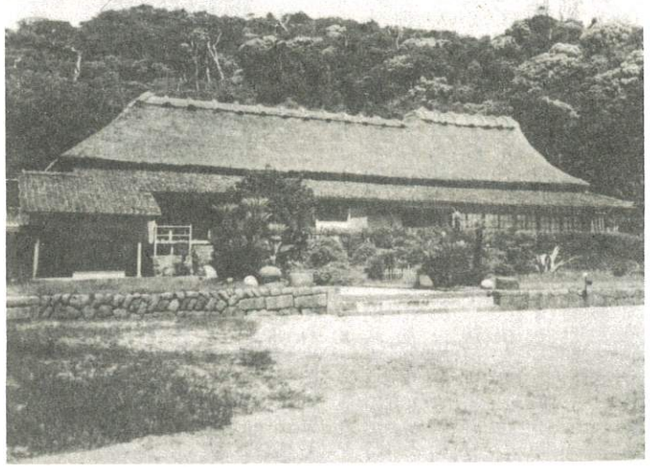
宮司　鵜戸さんには明治以前の古い書類は無いようです。

伊勢木　明治の始めに或る人が地位を利用して、鵜戸さんの資料を柳行李で四つほど鹿児島に持って行き宇土神社が出来たと云う事も聞いています。悪い言葉で言いますと鵜戸さんの歴史はすっかり盗まれてしまったと云う事でしょう。

宮司　それは措しかったですね。それでしょうか、鹿児島には鵜戸さんの古い資料がある様です。先年野田敏夫さんが、鹿児島県立博物館で「鵜戸詣道の記」を見つけて下さいました。

伊勢木　私が一番惜しかったのは社務所の焼けた事です。戦後私は度々社務所にお邪魔しておりました。後藤宮司さん（後藤幸平二十三年から二十九年）の時でした。後藤宮司さんは両部神道のお宮については詳しい方でしたので、いろいろお話をした時に、方丈（社務所）の中に中二階があって、其処に古い版木や何やかや一ぱいあったのです。あれを一ぺん見せて貰い度いと申して居りましたが、其の機会を得ず四十五年火事ですっかり焼けてしまいました。

宮司　ほんとに惜しい事でしたね。私も聞いて居りますが、書院の板戸は唐獅子や、鳥や花が描かれていて立派なものであったので、平生これをはめて置くのは勿体ないと外して其の中二階に上げて置いて、却って焼けてしまったと言う事でした。


昭和45年焼失した旧社務所

伊勢木　先年或る人から、鵜戸さんの歴史を書いた木版があるがいらないかと言われ、壱萬円ほどで買いました。まだ刷ってみませんが、活字にならない前の鵜戸さんの事が書いてあると楽しみにしています。それから以前私が鵜戸さんの紙開発の燈籠の歴史を調べた時に、それを毎日新聞が全国版に載せてくれました。ところが京都の知らない人からハガキが来て、その人を訪ねて見ましたら、それは紙屋さんで、珍しい全国藩札を持って居られました。そして藩札のイミテーションの奇麗なものも持って居られました。そして其の紙開発の曰く因縁を書いた最後の版刷を持って居られ、それは本物でした。

宮司　その古い版木は楽しみですね。刷られましたら見せて下さい。

伊勢木　又、社務所で惜しかったと思いますのは書院の欄間です。唯、板を切った単調のものでしたが、実に調和のとれた素晴らしいものでありました。

又、影向の間（神佛が一時的に此の世に現れる間）の書院の窓は素晴らしい調和のとれた組立式であって良いものであったので、早いとこ国か、県か、市かの文化財に指定すべきであると申しているうちに焼けてしまいました。

又、影向の間の後に別当の居間があって、其処の便所が又、京都の高貴の方のお屋敷のものと同じであった。一坪の広さで畳が二枚敷いてあり、便は下で砂の入った塗箱を受けて一回毎に取る様になっていた。昔高貴の方の健康状態は、この取った便によって管理して居たと言われ珍しいものでありました。

宮司　ほんとに珍しい便所でありましたね。

伊勢木　そして便所へ通ずる廊下の土間には沐浴斎戒する潔斎風呂が置いてありました。

宮司　それから和楽堂（社務所の大広間）の床の間にかなり大きな狛犬が一つ置いてありましたね。

伊勢木　あれはたしか第四十六世隆珍法印の名前が裏に書かれて居り由緒ある狛犬でした。

宮司　あの狛犬は、夜な夜なお供え物を食べるといって、初めて奉仕する若い神主の度胸試をしていたと聞いて居りました。

伊勢木　社務所の焼けた時私はお見舞に来ましたが、其の時或る人が「こんど新しい立派な社務所が建ちますよ。」と言われました。私は其の言葉を聞いて腹が

鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺時代の社号標

立ちましたから、「立派な社務所は建てられても古い歴史は造れませんよ」と申しましたら、其の人は黙ってしまいました。文化財保護委員をしている者としてつくづく残念に思いました。

宮司　全く同感です。

伊勢木　鵜戸さんは立派なものでは困るのです。新しいものよりも歴史的と言いますか、歴史を大事にすることを忘れてはならないのです。

宮司　県外の参拝者の中にも、昔お参りした事のある人は、奇麗な新しい社務所を見て、昔の萱葺の社務所を懐しみ「萱葺の社務所が無くなって淋しいですね」と言われます。

伊勢木　そうでしょう。

宮司　護国寺には神主も居ったのですか、快久さんが勅命を奉じてお寺を復興したと伝えられて居りますが。

伊勢木　神主も居ったのです。快久が来てお寺を再建したのだから、すでに何かあったのですね。第二十九代の欽明天皇の御代に、すでに右大臣の子供の祐教礼師が由緒ある鵜戸さんに流

光喜坊快久の墓

されて来ているのです。桓武天皇の延暦元年に光喜坊快久が勅命を奉じて来て、神殿を再建、佛閣僧坊を建てた以前は、結局伝説とか神話とかそういう形で伝えられているから、真実かわかりませんが、鵜戸さんの歴史を語る為には、伝説も神話もそれを反古にしてはいけません。

宮司　桓武天皇の延暦元年に天台の僧快久さんが来たと言うのは疑問ですね。

伊勢木　鵜戸さんの資料によると、快久は天台の僧とありますが、延暦元年にはまだ天台は開宗していませんから、天台の僧と云うのは全くの誤りです。しかし桓武天皇の延暦元年に勅命を奉じて来ている事は間違いありません。そして何代目かの別当の時代に天台から真言に変った時には、これは法親王の直祭になったと言われている。其の直祭の時から真言になったと思われます。京都の仁和寺は両部神道の本山ですから、代々の別当は智積院で学び、仁和寺で別当に任官したものである。別当は親任官でありますから、菊の花の十六紋章の緋の衣が許されていました。

鵜戸さんは別当が僧籍でありました。そうして神主も居りました。此処のお宮さんはお宮の中は神殿で其の脇に護摩堂が造られてありまして両部神道であります。高野山は今でもそうであります。管長が最高の形としてそれを祭っているだけです。此処も神社は神社としての形があって両立していました。其の点は間違いなく考えて置いて貰いたい。ただ別当が僧侶として総て来配を振ったと言う事であります。

宮司　霧島神宮も真言宗であった様ですね。

伊勢木　そうです。鵜戸さんの大親神さまの霧島さん（瓊々杵尊）も天台宗から真言宗に変っているのです。その頃の霧島さん（華林寺）の寺領は、驚くなかれ全国寺院及び社領の二分の一であったと言われていました。高野山が四分の一でした。如何に霧島さんが大きかった事がわかります。

真言宗と言うのは、神道と馴染みが深く考えられたと言う事ですね。

宮司　そうですね。

伊勢木　昭和六十年は神武創業皇紀二千六百四十五年ですね。この二千六百四十五年は尊ばなければなりません。

宮司　そうですね。今の学校では日本の最初の天皇を第十代の崇神天皇と教えていますが、第一代の神武天皇が居られなければ今日の日本はないのですから。

伊勢木　そうです。神武創業二千六百四十五年はほんとに尊ばなければなりません。そして既に神武創業以前に此処の鵜戸さんが有ったのですから、まさしく此

処が日本の発祥地であります。これは鵜戸さんの歴史として大きな要であるのです。だから伝説とか神話とか言うのは反古にするのはいけないのです。すべて民族の歴史を物語る事がその中に入って居るのです。こいつはこれは迷信とか何とか言うべきもので無く、明らかに歴史を伝えている一つの言葉であって、其の時代を物語っているのです。その年代が今から溯って短いなら科学的に考えて矛盾する事もあるが、何千年も永い前の年代のその伝説まで壊す理由は無いのです。

宮司　そうですね。今の偏向教育は日本の国（大和の国、瑞穂の国）の起りを、中国の魏志倭人伝から引いて、耶馬台国（野蛮の国）だの、日の御子を卑弥呼（卑しい女）と言っている。全く教科書は社会主義的な事ばかり書いて教えている。困ったものですね。

伊勢木　物語や神話は理屈ではなく民族の歴史の流れであります。

宮司　私等は先祖があって、親があって現在の私等があるのです。だから先祖を大切にしなければなりませんね。

伊勢木　総括しますと、鵜戸のお宮さんは、神道とか佛教とかは歴史の流れの中で考えられる事であって、歴史の中の一コマであるのでありますね。

宮司　そうですね。神道が昔から有って、そこに佛教が伝わって来て神佛混合となり、お坊さんがお宮を育てて来たのですから。

伊勢木　失礼な話ですが、佛教臭い色彩は総て無くさなければならないと考える人がありましたら間違いで、これは歴史を破壊するものであり、神武以来からのつながりが無くなってしまいます。やっぱり歴史の流れとしての佛教を見るべきで、歴史を尊ばなければなりません。

宮司　おっしゃる通りです。

伊勢木　戦後、後藤宮司さんの時でした。高野山の管長関栄覚さんが見えられました時に、鵜戸さんにお参りしたいと言うので私が案内してまいりました。後藤宮司さんと影向の間で率直にお話されました時、後藤宮司さんが、鵜戸さんの歴史の中の別当さんを別当祭として毎年慰霊祭を行っている事を話されました。私が話の中に入って、別当祭だけは神佛混合で行って戴けませんかとお願い申しましたところ、管長さんも出来るだけそうしてほしいと申され、それから以後ずーっと今の様に神佛混合で慰霊祭が行われているのであります。

宮司　ほんとに鵜戸さんらしい慰霊祭ですね。鵜戸さんには又、珍らしく琵琶の発祥地として伝えられて居ります。

琵琶を奏でる僧呂

伊勢木　琵琶は佛教の中で許された楽器です。先にも申しました様に、第二十九代欽明天皇の御代に右大臣の子供で盲目の祐教礼師が流されて来て、此の神窟で琵琶を弾き乍ら地神経を読んでいたのです。我国盲僧琵琶の発祥地と言われるのはそこにあるのでしょう。これが薩摩に入って薩摩琵琶となり、筑前に入って筑前琵琶となったと言われています。この事は鹿児島の常楽寺の記録の中に残っているようです。

宮司　鵜戸さんにはいろいろ素晴らしい歴史があります。

伊勢木　此処のお宮さんには、日本民族発祥の鸕鷀草葺不合尊の御誕生の歴史と、欽明天皇時代の祐教礼師により盲僧琵琶の発祥の歴史、桓武天皇の御代の僧光喜坊快久が勅命を奉じて神殿を再興し、寺院を建立し、別当に任ぜられた神佛混合の歴史、足利時代に相馬四郎義元（僧慈音）が念流を開き、受洲移香が陰流を創めた剣法発祥の歴史があるのです。これは特筆して大切にしなければなりません。これは鵜戸さんの歴史を物語る者としては忘れてはならないものでありましょう。

宮司　そうですね。

伊勢木　伝説も神話も尊いもので、今の人の知識でそれをがたがた批判するのは間違いであって、全くそのままに見ていけばよいのです。

宮司　そうですね。私等は鵜戸さんの此の歴史を史実として、次の時代に大事にしっかりと伝えて行かねばなりませんね。

どうも有難うございました。

社務日誌抄

七月十二日～十四日　責任役員研修旅行（北陸方面）
七月十七日　上賀茂神社宮司阿部信氏一行参拝
七月二十四日　上賀茂神社権宮司竹原貞三氏一行参拝
八月二日～三日　NHKテレビ撮影のため来宮（海に住む神社）
八月八日　下賀茂神社権宮司鳥井清三郎氏参拝
八月十日　責任役員会開催（黒岩県神社庁庁長参列）
八月二十三日　宮司就任奉告祭（辞令八月二十日付）
八月二十七日　三菱重工社長末永總一郎氏一行参拝
八月三十日　宮崎神宮名誉宮司甲斐武教氏同宮元禰宜渡辺司津佳氏参拝
九月一日　京都若宮八幡宮宮司松井息風氏参拝
九月二日　京都国学院教務主任井関忠直氏参拝
九月七日　宮司就任祝賀会
九月十二日　淵上ミヨ氏、今井重市氏、後藤タメ氏、昔の鵜戸さんを語る会に出席
九月二十五日　人吉市老神神社総代堤之雄氏一行参拝
十月四日　検事総長江幡修三氏一行参拝
十月七日　邦泳グループスイミングスクール会長菅原宣彦氏一行参拝
十月二十二日　黄檗宗宮長大本山萬福寺住職兼全日本仏教会副会長村瀬玄妙氏、同執事奥田仁芳氏、埼玉医科大学教授柳瀬有禅氏、清水寺大西元貫主夫人参拝
十月二十六日　毎日映画社石井敏明氏社頭風景撮影のため来宮
十一月三日　明治祭
十一月二十三日　新嘗祭（五穀豊穣感謝祭）
十一月二十四日　広島東洋カープ日本シリーズ優勝奉告祭のため来宮
十二月二十七日　煤払祭
十二月三十一日　大祓式、除夜祭

広島東洋カープ日本シリーズ優勝奉告祭

職員紹介

思いやる心

権祢宜　中武信明

小宇宙のようにどこまでも澄み渡り、うっかりしていると引き込まれそうな乳飲み子の目、まるで自分の心の穢れが洗われる思いがする。成長するにつれて、ある時は希望に胸を脹らませ、又ある時は挫折し切磋琢磨しながら人生を乗り越えて行く、その過程において一番大事な物を忘れて来ているのではないだろうか。

人から親切にされるとありがたく思い、怠慢な態度を取られると不機嫌になる、誰もがこんな経験はされた事だろう。人間とは身勝手な者で親切にされた事はよく忘れてしまう様だ。犬でさえ三日飼ったらその人の恩は忘れないと言われているのに、人間とは誠に都合のいい生き物であると思う。この様な考え方だと、社会全体が「自分だけが」と言う事になりかねない。もっと相手の立場に立って考えられる心、思いやる心、一歩譲る心を育てなくてはいけないのではないだろうか。仕事の面だけ取っても、自分が忙しくても、頼まれた仕事は気持ちよく引き受けるのは、難しい事だと思う。

中にはいつも考えて実行していると言う人もいるかもしれないが、人間には喜怒哀楽がある。平情心の時と動揺している時とでは、受け取り方がずいぶんと違ってくるだろうし、割り切って考える事は難しいと思う。自分としては、反省をするという事が大事だと思う。

そうする事によってより一層相手の立場に立って考えられる人間になれると思う。しかし、この事は時と場合によって変ってくるだろう。思いやる事は結構だが、それが甘やかしにつながっているのでは、何の意味も無くなるし、相手にもマイナスになるだろう。

この区別は難しいが、神惟の道に奉仕しながら日々学んで行きたいと思う。

鵜戸神宮に奉仕して

出仕　田原精二

私は、此の度鵜戸神宮に奉職しましたが、私は今まで正階の資格を取得する為に二年間勉強してきました。その二年間は、色々な神社の祭典や行事に奉仕してきましたが、それは、一時的な奉仕であり、深い意味のある奉仕ではなかったと自分自身思います。それは学生生活の中での事であり奉職したとは言えないのである。しかし今の私は違います。私は新たに鵜戸神宮に奉職したのである。この鵜戸神宮は、宮崎県の日南海岸に位置する所にあり本殿が洞窟の中にあります。それは、大変美しい所です。このような所に奉仕出来るという事は、大変光栄に思います。毎日の日供祭や毎月一回づつある月次祭や縁日祭その他数々のお祭に奉仕していますが、その神社神社に様々な様式がある事をもっともっと勉強し、又研究していかなければいけないと思います。私は、今現在奉職していますが、一般社会から見れば、社会人一年生となるわけです。社会人としての人と人との付き合い方、人と人との和のとり方などはどのようにしたらうまくいくかということなども神明奉仕の中に、見出されてくると思います。私はまだまだ若い二〇代です。無茶苦茶な事もするでしょう。また、失敗もするでしょうが、これからもこの鵜戸神宮に神明奉仕すると共に社会人としての勉強もしていきたいと思っています。

巫子　平下砂代里

鵜戸神宮に奉仕するようになってから早いもので十ケ月が過ぎてしまいました。早く感じたのも毎日が充実していたからだと思います。毎日、白衣・袴に身を包むと身が引き締り神に仕えているんだと自覚するようになりました。

奉仕していろんな事を沢山知りました。毎日が勉強のようです。笛・太鼓、神殿での所作・神道に関する事をまったく知らなかったのですが先輩方の教えで今では何とか分かるようになりました。巫子として鵜戸神宮に奉仕するようになって良かった事は、精神的に落ちつきがでてきた事だと思います。今後も自分を磨くとともに神に背むかぬように、また先輩に迷惑をかけないように精一杯奉仕させていただこうと思っています。

巫子　田代智津子

私が、神宮に奉仕して、十ケ月が経ちますが、海と自然に囲まれているのが、印象的でした。始めのころは、何も分からず不安でなりませんでしたが、今では漸く慣れてきました。

それに、先輩や友達と親しくなれるかが心配でした。でも、良い人ばっかりですぐに解けこめて楽しくやっています。

一番不安だったのは、笛太鼓の練習でした。自分では、音を出そうと思っていても音が出なくて、嫌になるほどでしたが、始めて音が出るようになった時はとっても嬉しい気持でした。少しでも練習して、いい音が出せるように成りたいものです。

笛、太鼓以外にも、覚えることが沢山あります。なかなか覚えきれなくて、失敗ばっかりしています。

でも、自分なりに精一杯頑張って行きたいと思っています。

巫子　阿部栄子

初めて白衣・袴を身に付け、鵜戸神宮に奉仕した私。

あの頃の私は、袴の着方も分からず、他人に迷惑ばかりかけていました。

それから十ケ月の月日がたち、今では神宮の祭典にも奉仕できて、うれしく思っています。

祭典に奉仕するまでには、笛・太鼓をはじめ、色々な事を教えていただきました。覚える事がたくさんあって苦労しましたが、私が一番苦労したのは、やはり笛でした。吹いても吹いても音が出なくて、出るのは「スースー」という音だけ。

〝こんな笛なんて〟と思った事も何度かありましたが、先輩方に教わった通りに練習していくと不思議と音が出るようになりました。音が出るようになったと言っても、まだまだ息が漏れて良い音色は出ません。これからは今まで以上に笛の練習をしていきたいと思います。

そして、これから先、楽しい事、つらい事、色々あると思いますが、自分自身責任を持ち鵜戸神宮の巫子としてはずかしくないよう精一杯奉仕させていただきます。

巫子　村田暁美

神宮に奉仕するようになって早くも十ケ月が過ぎてしまいました。

はじめのころは、髪の毛が短いせいか参拝者の方々からアルバイト生に間違われることが度々ありました。

今ではその髪の毛も少しのびてなんとか巫子らしくなってきたようです。

神主さんや先輩巫子さんもよくしてくださるので、神宮に奉仕し始めたころの緊張感もいまでは全くありません。

時には冗談など言い毎日楽しく働いています。

しかし、祭典の時は緊張感で一杯です。

足がしびれたり、笛の音がふるえるなどといった失敗をしてしまうこともあります。

いよいよお正月です。

私たち職員にとって一番忙しい時です。

きちんと奉仕できるか心配ですが、皆さんに迷惑をかけないよう精一杯奉仕したいと思っています。

巫子　桝田美智代

今年の三月二十一日、私は社会人として、鵜戸神宮から歩き始めました。普通の企業に就職するというのではなく、神様に仕える。ということなので私につとまるのか、とても不安で心配でした。

まずアルバイトとしてお正月に、お手伝いさせていただき、どのような事をするのか、一通り教えて頂きました。

いよいよ正職員として務めるようになりました。当時はいろいろな事を習い覚えていきましたが、その中でも笛と太鼓をマスターするということがとても大変でした。太鼓のリズムをまず覚えて、次に笛です。息を吹きこんでも音は鳴ってくれません。一週間くらいすると、音が鳴り始め曲の流れを覚えていきます。楽譜があっても五線紙ではありませんので、何が何だかわかりません。見よう見真似で覚え、自分の物にするのです。マスターしなければお祭りなど出して頂くこともできないので自分なりに一生懸命覚えたつもりです。

いろいろな事を勉強しながら今日まで過ごしてきました。今までを振り返ってみると、楽しかった事、悲しかった事など様々な事が思い返されます。白い白衣に赤い袴。この姿というと、清潔で清純という自分なりのイメージをもっています。

まだ、一年も経っていません。

これから先、沢山の事を経験してどんどん自分自身を成長させて、イメージにあうよう立派な一人前の巫子として、又人間として歩いていきたいと思います。

編集後記

厳寒の季節となりましたが、こゝ日南地方は無霜地帯で、他の地域と比べますと暖かい方だと思われますが、寒さはやはり身にしみる今日比頃です。

皆様いかがお過ごしでございますか、こゝに社報第二十号をお届け致します。

今回は、宮司と願成就寺住職で日南市議会議長、日南文化財保護委員の重職を務め毎日御多忙な伊勢木氏との対談を中心に、新職員紹介を併せて記載してみました。

国内外を問わず様々な出来事が日常茶飯事の様に続出していますが、我々斯界においても御神徳の昂揚はもちろん、世界にも視野を広げ難問に立ち向い、昭和六十年の佳年を迎えようではありませんか。

当宮も宮司以下職員一同一丸となって、それぞれの分野に邁進していきたいと思っています。皆様方の御指導をお願い致しますと共に、氏子崇敬者の方々の御健勝をお祈り申し上げます。

（谷口）